

山形張子の伝統守るぞ

ただ一人の職人・岩城さんに待望の後継者

孫が弟子入り、相伝

山形市の伝統工芸「山形張子（はりこ）」をただ一人で守る職人・岩城久太郎さん（八〇）に昨年、孫の勇二さん（三〇）が弟子入りした。七十年にわたる職人生活の中で正式に弟子を取るのは初めてという久太郎さんは、勇二さんの腕を「まだまだこれから」としながらも、待望の跡継ぎの奮闘に目を細めている。



山形張子の一つ、玉乗兎（たまのりつきぎ）の絵付けに久太郎さん（左）と取り組む勇二さん

「将来はオリジナルも」

さんは丁寧によつて伝授する。「昔は親父の作業を見て盗んだものだが、今はそんな時代じゃないから」と久太郎さん。勇二さんは仙台市の専門学校を卒業後、同市内で働いていたが、七年前に帰郷。脚を悪くした祖父の代わり作業に使う荷物の運搬などを手伝ううち、「長年続く伝統工芸を引き継ぎたい」との思いが強くなり、跡継ぎを宣言した。

市工芸品まつりに 2人そろって出品

あすから

山形市木の実町にある「岩城人形店」の工房。勇二さんはもう一つの家業である不動産業の合間を縫って週に二、三回、久太郎さんと製作に当たる。ウサギやダルマ、お面などをかたどった木型に和紙を打ち込み、筆で一体ずつ絵付けする。「動物の細かい表情など微妙なタッチが祖父のようにならない」。淡い顔の勇二さんに、久太郎

（これまで弟子入り志願者はいたが「一人前になるまで四、五年はかかる」（久太郎さん）という長い下積み嫌い、立ち消えになっていた。自分が倒れば伝統が途絶える危機的な状況だっただけに、久太郎さんのうれしさはひとしお。今では工程の一部を任せる。

②

山形張子 幕末の安政時代、京都の武士・渡江長四郎が山形に住み着き、山形から産出する和紙を使って京都・嵯峨人形の手法で和紙人形を作ったのが始まり。久太郎さんは7代目。岩城人形店の連絡先は023

(622) 6346。